17. Hypertrophic Pulmonary Osteoarthropathy の骨シンチグラフィの検討

仙田 宏平　中条 正雄　長谷川みち代
安江 森祐　辻 明　豊吉 久代
（国立名古屋病院・放）

全身骨シンチグラフィ施行症例について，Hypertrophic Pulmonary Osteoarthropathy (以下，HPO) 所見の陽性率とその特徴，ならびに肺病変および呼吸機能との関係を検討し，以下の結果を得た．1) 全身骨シンチグラフィを施行した397症例のうちHPO所見を呈した例は計15症例で，肺癌の115症例中10症例が陽性であった．2) 数か月以上の間隔で2回以上の検査を行った7症例中5症例はHPO所見の増強または減弱を示した．3) HPOに特徴的な下腿長管骨へのRI集積は全例で見られたが，半数例で膝関節部へのRI集積を認めた．4) これら症例は胸部X-Pと呼吸機能検査に異常を示したが，これら検査所見とHPO所見出現程度との間に関連性はなかった．

18. Dynamic Radiocolloid Liver Scintigraphy における "step formation" の解析

竹原 康雄　阿隅 政彦　北中 秀法
礒田 治夫　（浜松医大・放）

Tc-99m-フチン酸静注時に経時的データ収集を行い得られる肝のTACをパターン分類し，その中で肝動脈相と門脈相の間に段差 (step) を生じるパターンを step formation と名づけ，同パターンは門脈血流の肝へのわずかな到達遅延により形成されるものではないかという仮説のもとで，上腸間膜動脈造影 (PGE 併用) による門脈の描出時間と，肝TACの1次微分により得られた肝動脈と門脈のピーク間時間との比較を行った．例数6と少なかったが，r=0.8の相関があり，血管造影による造影剤の門脈到達時間も正常群より平均して1.5秒遅延していた．また，肝のTACの一次微分曲線から，肝動脈の peak と門脈の peak を r-fitting により subtraction してゆきその面積比から血流比を出す方法を提案した．

19. 閉塞性尿路疾患における腎実質機能評価 ——通過時間と分腎 GFR 測定——

油野 民雄　高山 輝彦　中嶋 憲一
利波 紀久　久田 欣一　（金大・核）
山田 正人　（同・RI部）
内藤 克輔　久住 治男　（同・泌）

閉塞性尿路疾患における腎実質機能変化を評価するために，分腎 GFR の他 mean transit time (MTT) を deconvolution analysis で求めた．尿路閉塞57例中，分腎 GFR の低下は27例の47％で認められたのに対し．MTT の遅延は41例の72％で認められた．また腎閉塞解除後では，MTT の改善は15例中9例の60％で認められたのに対し，GFR の改善は僅か3例の20％でしか認められなかった．しかし，腎実質機能高度低下例では，MIT の遅延はほとんど見られず，MTT による評価の信頼性に乏しい結果が得られた．以上，尿路閉塞における腎実質機能の評価には，MTT と GFR の両方による評価が必要と思われた．

20. 定量解析による ^{131}I-アドステロール副腎シンチグラフィ

奥田 康之　服部 孝雄　伊藤 綱朗
豊田 俊　大井 牧　寺田 尚弘
田代 敬彦　松岡洋一郎　前田 寿登
中川 毅　山口 信夫　（三重大・放）
北野外紀雄　（同・中放）

^{131}I-アドステロール静注10日目に前後2方向の副腎部カウントを相乗平均することで，腹厚中央の深度で，この平均値を吸収補正し，副腎摂取カウントを求め摂取率を算出した．正常群 (n=22) は 0.24±0.11％ (mean±SD) の分布で，Cushing syn. の hyperfunction 病巣は 1.89±0.91％ (n=5) と高値で，抑制された健側 0.062±0.053％ (n=3) と低値であった．Primary aldosteronism (n=8) の患側 0.55±0.17％ と高く，健側 0.21±0.08％ の正常域であった．Congenital hyperplasia (21-hydroxylase 欠損) の1例は，両側約1％と高値を示した．摂取率による定量評価はそれぞれの病態機能を良好に反映し有効であったが，さらに抑制試験が必要な例もあった．

Presented by Medical*Online